

教師が単元をつくる・ カリキュラムをつくる

「不安を生じさせたかと思えます。標準授業時数の週一時間減は、「週三時間の授業時数」という単位の自覚と学習指導のありようを変えるという意識改革です。それを現実の言葉で言い表すと、「時間数減のなかで何をなすべきか、どうするべきか」ということでした。具体的には、指導過程をあれこれ工夫して変えるというより、年間のカリキュラムをどう立てるかの問題でした。

ミニ単元をつくるとういこと

前号で、「連続ミニ単元『聴力養成訓練講座』」を紹介しました。これは、聴力をつけるために、一回五分の聴力訓練を、十回程度連続して行うものです。行う際には、十分の目標を決め、二三分の話を学習教材として用意します。教師の話がいちばん生徒の興味をひくようです。(教師の蘊蓄を披露する絶好の場であり、それによって、教師対

「シヨンの二つの方法の基本を身につけさせるわけです。聴き取り用ワークシート(学習プリント)は、四字熟語の視写と意味をメモする程度のもにします。調べて「スピーチのメモを書く」学習に「時間」「百秒スピーチ」は全員がやっても百秒×人数の時間で足りません。スピーチを聴く学習は語彙を増やす学習でもありません。評価はスピーチと四字熟語(あとのテストで)で行います。

教科書を使っての単元づくり

単元とは、学習のひとまとまりをいいます。教科書では一つの単元にいくつかの目標を立て、それに見合った教材をいくつか並べ、学習の方法などを示して、万人向けに作られています。だいたい一か月くらいで学習が終わるようにならされていて、これをこなせば、初任の先生でも力がつくことが保証されています。

しかし、本来学習は、学習者の実態から出発し、目標を立て、教材(学習材)を準備し、学習方法を考えて実施に移すものです。学習者に合ったもの、学習者の力となっていくものでなければなりません。

単元にはいくつかの形があります。目標の達成を目として学習するプロパーの単元、小さな単元をいくつか作り、それを連続的・発展的に進めていく単元、いくつかの目標

するあこがれや信頼が深まることです。日常的なもので「ちょっといい話」、「言葉に関する知識や教養」、「読書に関する情報」などがよいでしょう。(生徒には聴き取り専用のワークシート(学習プリント)を渡し、記録は毎回提出させ、評価の一助にします。教師は、このワークシート(学習プリント)に記入されたもの・ことを自分の記録にも写し取っておき、(教師の手控えとし、)以後それを「学習材」にしていきます。十回あまりの学習を通して、生徒一人一人の聴き方の個性がわかってきます。

五分の学習を十回連続して行うということは、約三週間かけて訓練するということであり、総計五十分の学習を一回やっても意味がないということ、力になっていかならぬということなのです。このような小さな学習、ミニ単元を、年間カリキュラムにいくつか組み込むか、これが教師の工夫のしどころです。

こんなこともできます。生活語彙として必要と考えられる「四字熟語」を、「生徒数プラス五」語分用意します。だれがどの語を学習するか、分担を決めます。四字熟語の意味を調べ、四字熟語を使った「百秒スピーチ」を構想させます。できたところで、「百秒スピーチ」を毎時間一人か二人が行います。分担した四字熟語はフリップ(毛筆で書かせてもよい。フリップではなく、短冊形に切った模造紙でもよい。))にして、それを掲げて話すというプレゼンテ

をもつて総合的に学習する単元などです。

プロパーの単元とは、例えば、「書くこと」の「意見をどのように構築していくか」に目標を定め、そのノウハウが身につくように順を追って学習するということですが、「単元学習」というのは総合的に進めていくものですが、目標とそれに合った言語経験・言語行動が設定され、学習材が用意されて学習が展開していくダイナミックなものです。年間計画を考える場合は、この二つを配置することから始めて、その間を縫うような「際」(単元と単元の間を埋めていく)の学習、落としかねない重要な学習を拾い上げて、それをどのように埋めていくかを考えることとなります。

教科書の単元を見ますと、自分の担当する学習者に何が必要であり、何を落としてはいけないのかがわかってきます。時間数減だからこそ、ただ教科書どおりに進めるのではなく、教科書の中の教材や学習展開の方法を使って、自分の生徒に合った単元に作り変えて(独自の年間計画を立てて)学習を進めることが大事ではないかと思えます。教科書は第一級の教材を組み合わせ、指導事項や学習方法を十分に考えて編集されていますから、それを上手に使いこなして学習を進めていけば、「力」がつくのだというところを確信して、自信をもった学習を展開してほしいと願います。

(前大正大学教授)